連載

市長室からこんにちは

vol. 65

益田市長
山本 浩章

現在47の都道府県がある日本は、かつて石見や出雲といった「国」に分かれていました。「日本六十余州」などといいますが、厳密にすべての国を数え上げるとその数は68になるとするのが通説です。一方で、壱岐と対馬を「国」ではなく「島」としたり、備前・備中・備後をまとめて吉備としたりして、66とする見解も有力です。いずれにせよ日本がまだ多くの国に分かれていた江戸時代、「大日本沿海輿地図」という極めて正確な日本地図を作った伊能忠敬という人物を2回にわたり取り上げてみたいと思います。

1745年に現在の千葉県九十九里町に生まれた忠敬は、18歳のときに現在の香取市佐原の伊能家の婿養子となりました。伊能家は酒や醤油の醸造、金融、水運など幅広い事業を営む豪商でしたが、当時の経営状況は思わしくなく、忠敬には家業再興への期待がかけられていました。

幼少期から学問好きだった忠敬にとって、商人の家を継ぐことは本意ではありませんでした。しかし、生来の勤勉さに加え、商機を的確に察知する秀でた能力を備えており、新たにコメの仲買を手掛けたり、江戸に薪問屋を出店したりと、新規事業にも積極的に乗り出し、10年ほどで経営を完全に立て直しました。37歳のときには名主に取り立てられ、利根川の堤防工事を取り仕切るなど公共の防災事業にも力を注ぎました。全国に多数の餓死者が出た1783年の天明の大飢饉の際には、領主に対し年貢の減免を歎願する一方で、保有する米を地元の貧しい農家に格安で分け与えたため、近郷からは一人の犠牲者も出ませんでした。

このように、商人として、また地域の名士として申し分のない活躍と貢献を果たした忠敬が、子どもの頃からの夢であった学問の道に進むために、家督を息子に譲って隠居したのは、当時の平均寿命とほぼ同じ50歳のときでした。そしてまさにそこから、普通であれば悠々自適の余生となるべき日々を、歴史に残る偉業を成し遂げるための「第二の人生」とするのです。

中世益田講座　我ら、益田氏家臣団！編（全12回）

第9回　下野守系益田氏

【問い合わせ先】
市文化財課　☎31-0623

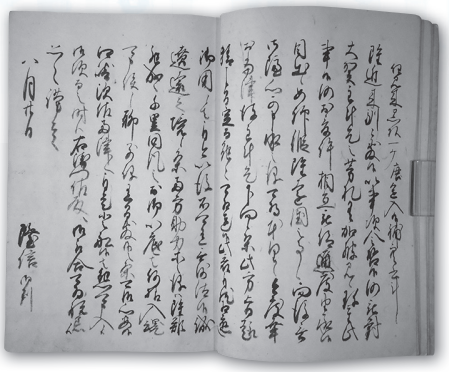
中世益田氏の一族に、益田貞兼の子の兼勝、その子兼貴、さらにその子兼友と続く家系があります。兼勝・兼貴がともに下野守を称したことから、この家系を下野守系益田氏と呼ぶこととします。この一族については、山口県文書館（山口市）に「益田高友家文書」という古文書群があり、その歴史がわかります。

永正7（1510）年に、益田兼勝は兄宗兼から小坂・徳屋・下黒谷・木わみ（喜阿弥）で領地を与えられており、このときから本家から独立した家系となったと考えられます。兼勝は同15年の洞明寺合戦（浜田市三隅町）で活躍したり、備後国（広島県東部）に出陣したりするなど、益田氏の有力な一族でした。

兼勝の子の兼貴は、大内義長、陶晴賢、内藤隆世、尼子晴久、毛利元就・隆元など大名やその重臣から書状（手紙）を宛てられており、やはり益田氏の有力な一族と見なされていたようです。

兼貴について特筆すべきこととして、平戸（長崎県）などの大名松浦隆信と交易上の提携関係を結ぼうとしたことが挙げられます。年未詳ですが、松浦隆信は益田兼貴に宛てて、協力の申し入れがあったことに感謝し、須佐・江崎（萩市）に舟を派遣した際には便宜を図ってほしいと依頼しています。しかし、永禄5（1562）年に津和野の吉見氏の攻撃を受け、須佐の磯の城が落とされ、兼貴の家臣らが多数戦死しました。

その後も兼貴は子兼友とともに天正14（1586）年からの豊臣秀吉の九州攻めに従軍し、宇留津城（福岡県筑上町）攻めなどで活躍しています。



「益田高友家文書」の松浦隆信書状写